
鬼の事情

小野 大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の事情

【Zコード】

Z3352T

【作者名】

小野 大介

【あらすじ】

インターホンが鳴った。

来客かと思い、扉をあけると、そこには赤い壁が……。

(前書き)

ある日、ふと思いついた話です。

そのある日がいつかは、最後まで読んでいただけたらわかるかと。

ある日の夕方

ふいにインターホンが鳴り、来客かと扉を開けると、そこには壁があつた。

「あれ、なんだこりや……？」

おうとつのある真っ赤な壁が田の前に聳え立つていた。田の錯覚かと思い、まばたきしながら近づいてみると、

「ゴメンよ。ちよつとやら邪魔をせとまいかわなあ」

頭の上から声が聞こえた。

「え？ うわあつ！」

見上げれば、そこには顔があった。大きな顔だ。その上、真っ赤。壁だと思ったそれは壁ではなかつた。男だ。巨体の男。見れば、その頭には一本の角が生えている。

「おつ、鬼……！？」

大きな身体を器用にくねらせながら、鬼は、我が家の狭い玄関をくぐり抜けた。

扉の外で立ち尽くしている家主をよそに、鬼は畳の上に胡坐を搔き、くつろぎ始めた。

「あ、あの……」

そつと部屋の中を覗き込み、恐る恐る、声をかける。

「ん？ おお、すまんのつ。今日一日だけのことやから、まあ許してえな」

鬼は鋭い牙を見せて、にっこりと笑つた。

「は、はい……」

それで納得出来るはずも無いのだが、その牙の鋭さや、鬼の巨体

が見せる迫力に負けて、それ以上、なにも言えなかつた。

「お、鬼が……！？ どうして……！？」

当然のことながらうろたえ、鬼の居る部屋の前の廊下を行つたり来たり。……しかし、狭い我が家。行き場が無く、気づけば玄関すぐ横のキッキンに立つていた。

そのとき、ふとあることに気づいた。

「あのう、とりあえず、粗茶ですが……」

鬼とはいえ、一応は客人。……いや、客人？

とはどうでもいいが、相手は鬼のだから、機嫌を損ねれば厄介なことになる恐れもあるわけで、ひとまず安いお茶とお茶菓子ではあるが差し出して、出来る限りのもてなしをしようと考えた。

「おお、すまんのう。おまえさん、若いのに気が利くなあ」

鬼はまた笑顔を見せると、腰を軽く浮かし、湯呑みを取つた。正しくは湯呑みではなく、陶器で出来たビアジョッキ。きめ細やかな泡が出来るとかいうやつである。それしか鬼の手に合ひつものが無かつた。

鬼は、ズズウ～～～、と音を立ててお茶を啜り、一息ついた。

「あのう、えーっと、鬼様でいらっしゃいますでござりますよね……？」

自分でもなにを言つているんだか……。

「ガツハツハツ！ そう伝えんでええよ。なにも、取つて喰おうといふわけやないから」

鬼はまた笑つた。なんだか、気さくな感じのする人物……いやもとい、鬼である。

「はあ」

想像していた鬼と感じが違うので、戸惑つてしまつた。

「ワシはなあ、赤鬼や。つて、見ればわかるわなあ。ちょっとわけがあつてなあ、それで泊めてもらおうと思つてなあ」

お茶菓子を大きな口の中にひょいと放り込みながら、鬼は語り出した。

「「」時世やから油断しどつてなあ。隠れ家を造り忘れとつたんよ。まさか急に親戚のわっぱ共が来るとは思いもせんかつてなあ、アハハハツ」

「はあ」

なんとなく聞かなければいけない気がして、その場に腰を下ろし、鬼の話に耳を傾けた。

「それにしても、最近は便利になつたのう。昔とは大違いやでえ」「はあ……」

鬼の話は延々と続いた……。

「それでなあ、来年はなあ」

途中から、恐怖と緊張が入り混じつてわけがわからなくなり、話半分に聞いていた。

それで、ふと気づけば眠つていたらしく、朝になつていて。鬼はいつの間にかいなくなつていた。

「…………夢、だつたのかな?」

いや、夢ではない。鬼が胡坐を搔いていた畳にはくつきりと跡が残されてあつた。重みでわずかだが陥没していた。それに、置手紙も残されていた。

『お世話になりました。約束どおり、一晩だけ。お茶と、一宿のお礼として、おまえさんとこの邪氣を持つていくわなあ。行事なんやから、ちゃんと豆まきやあ』

なかなか、達筆な字だつた。サインペンで書いているが。

「…………ああ、昨日は節分か」

手紙を読んで気づき、カレンダーを見て納得した。

「やつこつことか……」

どうやら、あの鬼は、節分の豆まきで追い出された鬼だつたよう

だ。あの言い分だと、普段は豆まきをしない家なのだ。それで急遽、仕方なく我が家を間借りしたのだ。

「へえ、本当に豆が苦手なんだなあ」

あの鬼が来てからとこりもの、なんだか住みやすくなつた気がする。具体的にどう? と言わると難しいのだが、なんとなく空気が違つのだ。

隣人とのトラブルが減つた。ものの考え方も変わつたし、健康にもなつた。あと、運も良くなつた気がする。

きっと、あの鬼が、邪氣とやらを持つていつてくれたからなのだ。ひつ。

一つ不満があるとしたら、畳の一部が陥没していく、たまに躊躇つことぐらいだ。

……ところで、ずっと氣になつていてることが一つある。

それはあの鬼に出したお茶菓子

あれは、近所にある和菓子屋で買つた豆大福だった。あとで確認したが、中に入つている豆は、大豆だった……。

豆やら、食べる分には問題無いらしい。

(後書き)

いかがでしたか？ 楽しんでいただけましたら幸いです。

様々な方の「意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら助かります。あと、とっても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3352t/>

鬼の事情

2011年10月9日01時50分発行